

サレットの「異端」と19世紀末の意味

—オカルティズムと聖母マリア (その3)¹—

大野 英 士

0.

18世紀末のエピステーメの転換にともない神を抹消したヨーロッパ世界は、その帰結として左派・共和派も、右派・カトリック=王党派も、こぞってオカルティズムの深淵に転落した。カトリックの世界に生じたオカルト現象の最たるものは、この時代に集中して現象した聖母マリアの「出現」である。実証主義にもとづく輝かしい科学の世紀である19世紀は、一方で、聖母の現れた聖地に向かって多くの信者が巡礼を組織する「聖母マリアの世紀」でもある。ローマ教会はその中のいくつかを「公認」し、大革命によって衰退した信仰の拡大を目的に、正統信仰の枠内に回収しようとした。しかし、「ラ・サレットの出現」におけるように、公認された「出現」にも正統信仰に回収され得ない曖昧さがつきまとい、その周囲に異端やオカルト的なグループが蝟集していた。この論考では、1846年に発生したラ・サレットの出現を取り上げ、その経過を追うとともに、こうしたオカルト的な19世紀と対置される19世紀末の意味について考えていくことにしたい。

1.

1846年9月19日、深夜3時ころ、2人の年若い羊飼いが、南アルプスに位置するイゼール県ラ・サレットの山腹で、目もくらむような衣装を身につけた「美しい婦人」la belle dameを目にした。この時、メラニー・カルヴァ Mélanie Calvat (1831-1904) は14歳、マクシマン・ジロー Maximin Giraud (1835-1875) は11歳だった。この見知らぬ女性は、最初子供たちにフランス語で話しかけたが、子供たちがフランス語がわからないと知ると、今度は土地の方言で、長い「秘密」を伝えて、忽然と姿を消した。子供たちは、雇い主のもとに戻って彼らに自分がみてきた不思議な出来事を話した。子供たちの雇い主たちは、「ほとんど文盲だった」が、この話をフランス語で書き取った。そして自分たちの発案で、『ラ・サレット=ファラヴォーの山で2人の子供に聖母が語ったお告げ(手紙)』²という題までつけて公表した。

聖母「出現」の話が広まると、聖母に対する崇拝が自然発生的にわき起こり、村人や巡礼が聖母の救いと許しを求めて大挙して山に登っていった。まもなく奇跡的に病気が治ったとか、不信心者が回心したという報告が続き、それもこれも聖母が取りなしてくださったのだという噂が一層かまびすしく喧伝されるようになった。

聖母「出現」の信憑性に関しては、各方面から疑義が寄せられた。聖職者も例外ではなかった。初めのうちは、リヨンの大司教であったボナルド枢機卿 Louis-Jacques-Maurice de Bonald (1787-

1870) や、アルスの主任司祭ヴィアネー師 Jean-Marie Vianney (1786-1859) など、この噂をずいぶんいかがわしいとみなしていた³。教会の有力者が噂に否定的であったこともあって、奇跡を認めない人々は、数こそ少なかったがなかなか頑強だった。しかし、澎湃としてわき起こる新たな信仰の高まりが、その後のこの事件の方向に決定的な役割を果たした。聖母出現から1年後の記念日には、グルノーブルの司教の許可を受けて作られた仮の礼拝堂に、3万から4万の信者が集まった。信者間の口コミやら、手紙のやりとりによって、事件の噂はドフォーフィネ地方を越えて広がり、宗教系、反宗教系それぞれの新聞も介入して自派の主張に有利な方向に事件を解釈するなど、聖母をめぐる論争が白熱化した。

グルノーブル司教ブリュイヤール Filibert de Bruillard (1765-1860) は、聖堂参事会員で、副司教のオルセル、同じく聖堂参事会員のルスロに聖母出現に関する調査を命じたが、聖母出現から2年後の1848年、2月革命から数ヶ月後に、この事件が正真正銘の「奇跡」だとする結論を下し、『1846年9月のラ・サレットにおける事件の真実』⁴と題する報告書を出版した。ポナルド枢機卿は聖母出現に対して、長いあいだ、煮え切らない態度を示してきたが、ここに至って、ついに態度を変え、ラ・サレットで聖母が子供たちに託した「秘密」をローマ法王に伝達するよう労をとった。グルノーブル司教ブリュイヤールが、司牧書簡によって、確かに聖母マリアがラ・サレットに現れたことを公式に認めたのはようやく1851年の秋のことである。

教会関係者は、この「超自然的」現象に、聖母マリアの^{インマキュレ・クール}汚れなき心がアルプスの奥深い寒村にまで、慈悲深い恵みを示していることの、明白な証拠と考えた。聖母のメッセージは、なるほど語句は激しいが、信者に対して悔悛をうながすメッセージと考えれば理解できないわけではないというわけだ。しかし、この事件の背後には、単純に正統派のラインには還元できない異質な要素、むしろカトリック以前の古い宗教や「異端」に連なる要素がほのみえている。

まず、注意すべきは、この聖母マリア出現という事件は、カトリック世界の奇跡の物語である前に、フランス農村地域に古くから伝わる「泉」に対する信仰と深く結びついているらしいということだ。メラニーやマクシマンは、彼らの前に現れた女性を聖母ではなく、終始「美しい婦人」la belle dameと呼んでいた。また、ミュールの助任司祭ラビユー神父 abbé Rabilloud⁵が、上司である司教に書き記しているように、少なくとも地元の村人たちにとって、彼女は「泉の婦人」la Dame de la fontaineと同一視されていた。19世紀に多発した「超自然現象」の研究者クロード・ギエによれば、聖母とされた女性はいずれも、郷土の神聖な場所で起こった怪異な自然現象にちなんで登場する妖精や大地母神などと特徴を共有している⁶。

また、聖母が子供たちに託したという「秘密」は、少なくとも子供たちの雇い主が聞き書きした版では、形式や文体などの点で「天から落ちてきた手紙」ないしは「神の手紙」と呼ばれる書簡体の布教パンフレットと酷似していた。これは17世紀から19世紀にかけて、フランスの地方の民衆のあいだに広まった現象で、神やイエス・キリスト、聖母マリア、天使など、神聖な存在が自ら執筆したというふれこみの「1人称体」の手紙の形をとる。綴じられていない、1枚の紙片に書かれたものが、大量に作られ、村々をまわって小間物や化粧品などを商う行商人の手で、安い値段で大量に売られて人々のあいだに流通した。言葉遣いはいかにも稚拙で、作者はあまり教育を受けていない階層に属していたものと推定され、内容的にも文体的にもだいたいのところ決まった定式にのっとり書かれていた。ところが、1928年、S. = J. ドラエー神父が、ラ・サレットで聖母マリアが伝えたメッセー

ジと、ラ・ムルト出身のひとりの行商人が、1818年にイゼール地方で、「天上に由来する」というふれこみで撒いた3通の手紙のテキストのあいだに、驚くべき類似があることを指摘したため、とんでもないスキャンダルがわき起こった⁷。両者が似ているのは主として以下の3点だ。

1. 神（ラ・サレットの文書では聖母マリア）が、1人称で自分の怒りをぶちまけ、民衆の不信心を非難している。
2. 神（聖母マリア）の怒りは、信仰の実践を怠っていること、とりわけ、神に捧げられるべき主日である日曜に世俗的な活動を行うなど、信者のいくつかの悪い行いに向けられている。
3. 神（聖母マリア）が、この世の終末が近づいている、信者がすぐに自分の行いを悔い改めなければ、地震や、凶作、飢饉、子供の病など、さまざまな災禍が降りかかってくると、民衆を脅迫している。

つまり、両者のあいだには、ロシア・フォルマリズム以来のテキスト理論でいう間テキスト性が成立しているのである。

一方、ローマ教会が聖母マリアの出現を公認した後でも、「理性」の立場から聖母の出現に疑問を呈する人間も後を絶たず、出現の真実性をめぐってパンフレットや新聞記事がさかんに書かれた。とりわけ、『ラ・サレット・ファラヴォ（ファラックス・ヴァリス）あるいは、偽りの谷』⁸というパンフレットが公表されて以来、聖母出現を認めた教会と、聖母出現否認派との論争は一層激しさを増した。パンフレットの作者はジョゼフ・デレオン神父 *abbé Joseph Déléon* といい、ヴィルルボムの元司祭だった。彼は、聖母出現のもっとも強力な支持者だった副司教ルソロ神父が著した「ラ・サレットの事件についての新たな資料」⁹を厳しく批判した。デレオン神父は聖母出現を機にラ・サレットの泉水がもたらしたと副司教が主張していた奇跡ばかりでなく、聖母の出現そのものを否定した。デレオン神父が持ち出したのは、コンスタンス・サン＝フェレオル・ド・ラ・メルリエール *Constance Saint-Ferréol de la Merlière* という名の、奇矯な振る舞いで知られた、精神異常の女の存在だった。彼女が、羊飼いの少年・少女2人に、聖母マリアのふりをしてみせたというのである¹⁰。

しかしながら、ラ・サレットが教会権力の容認できない異質さを含んでいたという時に問題となるのは、聖母マリアが2人の子供に伝えたメッセージそのものであり、また、子供たちのその後の行動にあった。

II.

まず、聖母マリアのメッセージは、子供たちが雇い主に伝えた版ですら「アルカイックな終末論的な期待」¹¹の側に傾きすぎているきらいがあった。しかし、ラ・サレットのメッセージには、時期がくるまでは子供たち以外の人間には開示してはならないと聖母が固く口止めした、さらに秘教的な版が存在した。子供たちは、自分たち以外には知り得ない「秘密」を保持し、自分の好きな時に好きな形で開示できる特権的な存在、いわば、秘教の預言者＝開祖となる潜在的な可能性を与えられていたということになる。そして、その子供たちは、2人とも、彼らの存在自体が、聖母マリアの新しい聖地をプロモートしようとしていた教会勢力にとって邪魔になるような、厄介な性格を持っていることが明らかになってきた。このことは、政界や宗教界の周縁に蠢いていた、オカルト＝神秘主義的傾向を持つ人々やグループに絶好の介入の機会を提供することになった。

軽率で、落ち着きのないマクシマンは、ラ・サレットの秘密を自分たちの大義のために利用しようとしていた輩、具体的にはリッシュモン男爵一派の陰謀にやすやすとはまりこんだ。リッシュモン男爵とは、本名、アンリ＝エテルベール＝ルイ＝エクトール・エベール Henri-Ethelbert-Louis-Hector Hévert, dit baron de Richemont。ナウンドルフ同様、偽王太子のひとりである。ルアン近傍に生まれ、ルアン県の役人を務めた後、ルジュイールでガラス工場を経営していたが、1828年から翌29年にかけて、議会両院に嘆願書を書いて自分の称号と権利を公式に認めるように求めた。しかし、彼自身の主張するところでは、彼の人生は波乱を極めていた。若くして、ナポレオン麾下の名将として知られたクレベール将軍 Jean-Baptiste Kléber (1753-1800)¹² にしたがって、その後、世界の各地を転々としながら、さまざまな冒険に関わった。フランスに帰ったリッシュモン男爵は、彼の「姉」アングレーム公爵夫人 Marie-Thérèse, duchesse d'Angoulême (1778-1851)¹³ に面会する機会を得たが、アングレーム公爵夫人は、彼を弟と認めたにもかかわらず、つれなくもその後の面会を拒否したのだという。リッシュモン男爵は国家に対する陰謀や、詐欺で生涯数度にわたって投獄されたが、彼の口車にまんまとのせられ本物の王と信じる者、偽物と知りつつ詐欺の片棒をかつごうという輩には事欠かず、1848年の2月革命後に釈放されてからは、サン＝ジェルマン界隈の上流婦人を取り巻きにして正当な王として振る舞っていた¹⁴。

1850年、リッシュモン男爵の信奉者数名は、マクシマンをともなってアルスとリヨンを訪れ、彼らの「君主」の正統性を神から認めてもらおうとした。しかし、結果は無惨な失敗だった。この旅の途上、マクシマンはアルスの助任司祭レイモン神父 abbé Raymond に面会したが、レイモン神父はマクシマンの返答に彼を「詐欺師」呼ばわりする始末だった。レイモン神父が考えを改め、聖母の出現を認めるのは1858年、グルノーブル司教ブリュイヤール神父の取りなしがあつてからであるが、この事件は、聖母の出現自体に対する信憑性をいちじるしく損なつた。

しかし、教会権力にとって、本当の意味で危険だったのは、マリー・ド・ラ・クロワの名で修道女になったメラニー・カルヴァの方だった。類いまれな「幻視者」voyanteの資質を持ったメラニーはラ・サレットの「事件」の後にも、そして、新たに天よりお告げを受けたとして、次から次へと驚くべきメッセージを口にするようになったが、その中には少なからず「異端的な」要素が混じっていた。クロード・ギエは言っている。

ラ・サレットの羊飼いの娘は、ジョアシャン・ド・フロールや、グリニョン・ド・モンフォール、ヴァントラといった人々のように、世界の終末に向けた最後の準備をするよう命じられたと信じていた。それだけでなく、彼女は聖母の出現の際、預言の原資を獲得していた。まもなく地上を襲うことになっている数々の災厄を、幻想を視覚化したディアポラマ¹⁵のような迫真的なヴィジョンとしてみせられていた。内気で無口なメラニーは、結局のところ、危険な異端の教祖ではなかったのだろうか¹⁶。

ラ・サレットの羊飼いたちが、聖母出現を伝道目的に活用しようという教会の意図のためになるどころか、むしろ、有害であることが明らかになってくると、何らかの形で彼らを厄介払いするか、彼らの行動や態度が少なくともますます数を増しつつある巡礼に悪影響を及ぼさないような措置を講ずることが問題となった。

まず最初に、子供たちに彼らが聖母から明かされた「秘密」を法王庁のお偉方に告白させる必要があった。秘密が、子供たちの手に握られ、尾ひれがついて無限に拡大し、いたずらに民衆の興味や憶測をあおることになってはならない。グルノーブル司教の事務局長オーベルニュ Aubergne が子供たちから「秘密」を聞き出すことに成功し、書き写された秘密が司教座参事会員ゲランおよびルスロ両神父の計らいで1851年7月に法王ピウス9世 Giovanni Maria Matai Ferretti, Pie IX ou Pius IX (1792-1878) に送られた。秘密は法王自らが検分した後、ヴァチカンの書庫に収められ、二度と日の目をみることはないよう封印されてしまった。

第2の措置は、子供たちを聖母出現の聖地から遠ざけることだった。ブリュイヤールの後任としてグルノーブルの新しい司教となったジヌイヤック Jacques-Marie-Achille Ginouilhac (1806-1875) は、1854年、ラ・サレットの8年目にあたる記念日に行われた説教で、2人を最終的に「厄介払い」する意志を明らかにした。

羊飼いの子供たちの使命は終わり、教会の使命が始まるのです。彼らが聖地から遠く離れ、地上のどこかに散らばり、彼らが受けた大いなる御恵みに背くようになったとしても、聖母さまご出現の事実がいささかもゆらぐものではありません。というのも、聖母さまがこの世にお姿を現したことは疑いをいれないことであり、その後生じた事件がさかのぼって、この事実に影響を与えることはできないからです¹⁷。

マクシマンのほうは心配無用だった。彼は放浪生活を送った後、1865年から66年にかけて、ある新聞に対して名誉毀損の裁判を起こして、再び世間の耳目をひくことになった。このころ、どうやらマクシマンはパリでいかがわしい医業を営み、ラ・サレットの名を冠した秘薬を売って生活していたらしい¹⁸。

一方、メラニーが教会にとってははるかに危険だということは、誰の目にも明らかであった。そこで、災厄の芽を早いうちに刈り取るため、慎重に方策が練られた。彼女はジヌイヤック司教の命により、イギリスのダーリントンにあったカルメル会修道院に送られ、そこで修道女として6年を過ごした。事実上の軟禁生活である。しかしさしもの教会も、成人したメラニーの行動をそれ以上監視することはできなかった。1860年、彼女はダーリントンを出ると、フランスやギリシャなどを転々とした後、イタリア、ナポリ近郊にあるカトテラマーレに居をさだめるが、やがて、1870年代からヴァチカンの禁止にもかかわらず、異端臭の濃厚な著作を次々に出版し始める。これら、メラニーの著作には「千年王国説」的傾向が顕著にみられることは一目瞭然だ¹⁹。生涯の最後の時期に彼女が明かした「究極の」秘密においては、彼女の異端性は、自身を原罪を免れた「無原罪の御やどり」の地上における「受肉」と主張するところまで進んでいるのだという²⁰。

聖なる存在の「出現」に端を発した異端という点では、ノルマンディー地方ティリー＝シュール＝ソール Tilly-Sur-Seulles の預言者でピエール＝ユージェヌ＝ミッシェル・ヴァントラ Pierre-Eugène-Michel Vintras (1807-1875) がいる。彼は、1839年、天から啓示を得て、自ら「第三の支配、助け主の時代、永遠のキリストの到来」を準備するために地上に使わされた預言者エリーの再来と説いて、『慈悲の御業』 L'Œuvre de Miséricorde という異端セクトを設立して多くの信者を集めた。ジョゼフ＝アントワーヌ・ブーラン Joseph-Antoine Boullan (1824-1893) は、ローマ・カトリック

教会を破門された後、ヴァントラのもとを訪問している。1875年にヴァントラが急死すると、ヴァントラから後継者に指名されたと称して、1876年にリヨンで『慈悲の御業』の別派を組織した。これらの人々もまた、広い意味で「マリア派」の系譜に列なる異端といってもいいだろう。

III.

そこで問題になってくるのが「19世紀末」と呼ばれる特殊な時期の意味である。もう一度確認しておこう。19世紀末のこの時期、実証主義・科学主義に対する素朴な信頼が急速に衰退し、文学の面でも、擬似的にせよ、科学主義を標榜していた自然主義は急速に衰微し、反理性主義的傾向を持ったデカダンス文学、象徴主義文学がさかんになる。美術の分野で、印象派から後期印象派、ナビ派、象徴派への大きな意匠の転換が起こるのもこの時期だ。

一方、それと軌を一にするかのように、ニーチェ Friedrich Nietzsche (1844-1900) の「神の死」の定式化とほぼ同時期に、「カトリック復興」と呼ばれる神の信仰への回帰が生ずる。

すでに別の場所で²¹、我々はフィリップ・ミュレを引用しつつ、1886年のクローデルの回心を一つのメルクマールとして、フランス知識階層がなだれを打つようにカトリックへと回心したという事実を指摘した。フィリップ・ミュレによれば、このクローデルの回心はオカルティズムと進歩主義とが結びついた19世紀という特殊な世紀からの脱却を意味する象徴的な出来事だった。しかし、そうはいっても、19世紀の前半にさかのぼって、多くの民衆はキリストやマリアに敬虔な祈りを捧げていたし、ヴァントラやブーランといった人々も、異端とはいいいながら、聖母マリアへの崇敬は人後におちるものではなかった。確かに、彼らの信仰は、聖母マリアを初めとする「聖なるもの」の「出現」という、それ自体超自然的な体験を直接、間接の契機にするものだった。その意味では、フィリップ・ミュレの定式はここでも有効であるように見える。しかし、逆に1890年代以降、オカルトや異端がすべて姿を消してしまうわけではない。我々は、両者のあいだの差異をどのように理解するべきなのか？ 果たして、この時期に何が起こったのか？

たとえば、ヴァントラブーランと、ユイスマンス J.-K. Huysmans (1848-1907) - クローデル Paul Claudel (1868-1955) という組み合わせを考えてみよう。ヴァントラはフランス大革命からまもない1807年の生まれ。ブーランは1824年。かたやユイスマンスは1848年、クローデルは1868年生まれだから、二つの組み合わせのあいだには、およそ20年の隔りがある。ヴァントラブーランの世代は、聖母マリアの超自然的な出現が多発し、民衆次元でのマリア崇拜が沸騰していた、まさに当の世代である。一方、ユイスマンスクローデルの世代は、よきにつけあしきにつけ、実証主義・科学主義の影響下に育った世代であり、ジョルジュ・ソレル Georges Sorel²² (1847-1922) のいう「懐疑の精神」ないし、ニヒリズムの風潮を幼児から呼吸してきた人たちである。なかなか実態として提示することは難しいのだが、どうもこの二つの世代のあいだには、微妙な感性の差というのが存在するような気がしてならない。この二つの世代の差のうちに、もっと大きな認識次元の変換、19世紀末に生じたミシェル・フーコー Michel Foucault (1926-1984) のいうところの「エピステーメーの転換」を読み取るなどといったら、悪ずれと言われてしまうだろうか？

この時代の認識論的な布置の転換という問題に関しては、松浦寿輝氏が『エッフェル塔私論』²³の中で、「イマージュ」というキー概念をもとに、卓抜な所論を展開されている。しかし、この時代の

変化を「イマージュ」という問題だけで説明できるかということ、そうかな？ という疑問が浮かんでくる。イマージュといえば、確かにこの時代は、写真や映画といった前の時代とは異なる技術革新があり、明確に「目にみえる」形で、一つの文化やそれともなう一連の表象の変貌がもたらされたことは確かだろう。しかし、問題となるのは、ある世代はその変化を生きていながら、前の世代は、たとえまだ生きていたとしても、その変化の存在すらも感じ取ることができないような変化なのだ。この微妙な変化が果たして何に由来するものかをはっきりと名指す用意は今のところ私にはない。したがって、以下に書くことは、純粋な仮説、いわば話を前に進めていくための作業仮説のようなものとしてお聞きいただければと思う。差異は確かに微細だ。しかし、よく目をこらすと、多くの兆候が、時代の中にある種の裂開を形作ろうとしているのがみえてくる。

例えば、すでに挙げた『娼婦』という本の中で、歴史家アラン・コルバンは、まさにユイスマンスの『さかしま』の記述を引用しながら²⁴、18世紀末に始まる規制主義の計画にしたがって、婚外の性を厳格な管理のもとに囲い込む「娼館」*maison close* というシステムが、1877年ころから85年のあいだに急速に衰退し、女給を置くブラスリーや、音楽カフェ^{カフェ=コンセル}などにとって代わられたと指摘している。

『さかしま』の中で、ユイスマンスは次のように書いている。

実際、もろもろの徴候は明らかであり、確実であった。すなわち、すでに女郎屋というものは姿を消していた。そして一軒の女郎屋が店を閉めるにつれて、一軒のあやしげな居酒屋が開業するのであった。

人目をはばかる密かな愛欲に奉仕する、この売淫という慣習の廃絶は、人間に肉の欲望がある限り、ついに人類の理解を絶した幻想の裡にしか存在しないかのごとくであった²⁵。

娼婦を管理する方法も同様に、より洗練された形を取るようになり、性病防止や婦女の人身売買抑止といった口実のもとに、彼女たちを登録し効率よく監視を行うようになる。しかし、世紀末、娼館が完全に消滅するわけではない。一方で「世紀末は、大規模な放蕩の館の絶頂期であった」²⁶。これは矛盾でもなんでもない。恋愛や性愛に対する一般的な感性が変化し、性欲の処理にもロマンチックな擬似的な恋愛の装いを凝らす必要が出てきたため、民衆相手、プチ・ブル相手の「排水口」としての娼館が次々に閉鎖されていく中で、「世紀末」の公認娼家は一握りの特権的階層の特殊で洗練された趣味を満足させる「真の遊蕩の館」、「倒錯の性の殿堂とでもいうべきもの」²⁷となっていく。二つの現象は西欧の知の配置のより大きな変貌を示す一つの反映にすぎないのだ。

また、同じくアラン・コルバンは『においの歴史』の中で、やはりユイスマンスの『さかしま』の一節を引きながら、衛生思想や科学の進歩と相関する形で、この同じ時代に「におい」に対する感受性が変化し、現代的な意味での香水文化の成立が可能になったと指摘している²⁸。

すでに指摘したように、1886年、カトリシズムに回心したフィリップ・ミュレはクロードルを、彼のいう「19世紀性」、すなわちオカルティズムと進歩主義の特殊な結びつきを特徴とする19世紀からの、最初の脱出者とみなしている。しかし、これもすでに指摘したことだが、ニーチェによる「神の死」の宣告が書かれつつあったのも、ちょうどこのころだ。クロードルの回心が、時代を画する重要な意味を持っていたとすれば、それが単に「啓示宗教」たるカトリックのドグマへの帰一であ

ったからという理由ではない。問題となるのは、この時期、オカルティズムを媒介することのない宗教的な精神性への回帰と、無神論とが同時に可能になるような感性の変化が生じていたということだ。つまり、やや大袈裟に言えば、「超越的な神」に対する信仰と、「神の死」の宣告が、認識論的に同じ根っこから発した派生命題にすぎなくなるような現象が生じていたということではないのか。

この認識論的な変化は、実証主義的な発想にもとづく科学思想の進展を、背景にしているにしても、ただちにそれと同一視してしまえば、逆の陥穽に陥りかねないということになってしまう。例えば、実証的な視線が一般民衆にも浸透するにしたがい、それまで素朴に信じられてきた「霊」やエクトプラズム、エーテル、動物磁気などといった実体のさだかでない曖昧な「存在」が活動する余地はますます狭まってきた。あらゆる存在は「可視」的な環境の中に引き出され、いわば、霊的な存在の「実体化」「物質化」が行われるようになる²⁹。しかし、1880年代半ばに起こった危機は、絶頂にあった「実証主義」に対する信頼に重大な亀裂をもたらし、精神を再び不可視のもの、不可知のものへと向かわせる感性の覚醒をうながした。しかも、その時点で、過去の心霊主義へと直線的に回帰する退路はすでに断たれていたのだ。

1946年、マルティン・ハイデッガー Martin Heidegger (1889-1976) は『「ヒューマニズム」について』の中で次のように述べている。

人間の存在は「世界内存在」のうちに存するということが言い述べられるからという理由で、世間のひとは、だから、人間は、たんに此岸的な本質のものへと引き落とされ、それによって哲学は実証主義のうちに沈淪していると、見なす。というのも、人間存在の世界性を主張する者は、ただ此岸的なもののみを有効と言い張り、彼岸的なものを否認し、こうしてあらゆる「超越者」を拒否するのであって、そのように考えることよりも、「より論理的」なことが何かあるであろうか、というわけなのである。

「神の死」というニーチェの語への指摘がなされるからという理由で、世間のひとは、だから、そうした振る舞いは無神論だと宣言する。というのも、「神の死」を経験した者は、神一なしとする者であって、そのように考えることよりも、「より論理的」なことが何かあるであろうか、というわけなのである³⁰。

ここで問題になっているのは、ニーチェという「世紀末」体験を経た後、現代の哲学者に、「形而上学」の諸問題を考えることを可能にした、ある微妙な変化なのである。

ロベール・シュネルブは、名著『19世紀』の中で³¹、1889年から90年にかけて、精神主義・理想主義傾向の思想が一斉に開花したさまを見事に描き出している。この現象は、カトリックへの回帰と時期的にも、傾向的にも、完全にかさなるものであるが、この精神主義への回帰運動に含まれる名前としてシュネルブが挙げている名前は、ウィリアム・ジェームズ William James (1842-1910)、ジョン・デューイ John Dewey (1859-1952)、アンリ・ベルグソン Henri Bergson (1859-1941)、エドムント・フッサール Edmund Husserl (1859-1938)、レオン・ブルンシュヴィック Léon Brunschwig (1869-1944) といった名前であり、カトリック世界に限定されるものではない。我々は、このリストに、ニーチェの他に、パリのシャルコー Jean-Martin Charcot (1825-1893) のもとで、後に精神分

析の名前で呼ばれる神経症に対する新たな治療法の構想を練っていたフロイト Sigmund Freud (1856-1939) の名を加えることもできるだろう。つまり、別の言葉を用いれば、我々が考えなければならないのは、「メタ」フィジックと、「メタ」プシコロジーとを同時に可能にするような地平を開いていく契機となったのが、19世紀末に起きたと推定される認識論的な変化ではないのか？ ということなのだ。

IV.

19世紀末といえば、デカダンスや象徴主義、ギュスターヴ・モロー Gustave Moreau (1826-1898) や、オディロン・ルドン Odilon Redon (1840-1916) 等々、「死」や「病」「頹落」「退廃」「享樂」などあらゆる「否定」的な徴表にとりつかれているかにみえる。しかし、まだ完全にぬぐえているとはいえないこのイメージを逆転するところから始めなければならない。19世紀を通じて、例えばフランスの都市部で梅毒に罹患していた成人男性の割合は、20パーセントに達していた³²という数字がある。死や病、さらにはオカルト的信仰、死者の崇拜にとりつかれていた不健全な時代とは19世紀そのものなのだ。19世紀末に、それまで一世を風靡していた実証主義や自然主義に変わって、反理性主義傾向やデカダンス・象徴主義が登場してくる。しかし、デカダンス思潮とは単なる退嬰的・反動的な思潮ではなく、また、単なる文学運動ですらなく、それ自体、新たな認識論的断裂をともなった、知の組み替えの運動の総体としてとらえられるべきだろう。そして、19世紀末とは、「世紀末」という言葉から類推される病的な世界でなく、「現代」に向けての再生と浄化がテーマとして顕在化した時代なのである³³。

註

- 1 この論考は筆者が現在執筆中のユイスマンスに関する研究書『ユイスマンスとオカルティズム (仮題)』(新評論社より近刊予定)を構成する1章として構想されたものをもとに、再構成したものである。
- 2 原題は、*Lettre dictée par la Vierge à deux enfants sur la montagne de La Salette-Falavaux*.
- 3 「1850年、アルスの司祭はマクシマン・ジローに面会したが、彼はこの会見に満足できなかった。彼は1858年になるまで、ラ・サレットのメダルに祝福を与えることを拒んだ」G. Cholvy/Y.-M. Hilaire, *Histoire religieuse de la France contemporaine*, t.1., 1800/1880, Privat, 1986, p. 182.
- 4 *La vérité sur l'événement de la Salette. Du 19 Septembre 1846, ou rapport à Mgr l'Evêque de Grenoble sur l'apparition de la Sainte Vierge à deux petits bergers, sur la montagne de la Salette, canton de Corps (Isère)*, 1848, Grenoble, chez l'auteur.
- 5 ラ・サレットの出現当時、メラニーとマクシマンの聴罪司祭だった。
- 6 Claude Guillet, *La rumeur de Dieu, Apparition prophétiques et miracles sous la Restauration*, Imago, 1994, p. 182.
- 7 H. Delahay S. J., 《Un exemplaire de la lettre tombée du ciel》, in *Recherche de sciences religieuses*, 18, 1928, pp. 164-169; R. de la Perraudière, 《La Lettre de Dieu》, in *Mémoire de la Société nationale d'Agriculture, des Sciences et des Arts d'Angers*, VIII, 1905, pp. 131-136.
- 8 Donnadiou (alias, abbé Joseph Déléon), *La Salette Fallavaux (Fallax Vallis), ou la Vallée du Mensonge*, Redon, Grenoble, 1852-53.

- 9 L'abbé Rousselot, *Nouveaux documents sur le fait de la Salette*. ファクシミリ版の新版が以下より出ている: Edition scannée et faximilée, Edition Saint-Remi, 2005.
- 10 Cf. Un article intitulée 《Miracle de la Salette》, in *Grand Dictionnaire de Larousse du XIXe siècle*, 1875 (1982), T. 21, Larousse, p. 108. 「実証的」な啓蒙主義にもとづくこの『19世紀ラルース』の記事は、一貫して、ラ・サレットの「奇跡」に懐疑的ないしは、嘲弄的な態度をとっている。
- 11 Claude Guillet, *op.cit.*, p. 179.
- 12 クレベール将軍：フランスの軍人。ヴァンデ地方の王党派の反乱の鎮圧に参加した後、ナポレオンのエジプト遠征の司令官となり、ヘリオポリスでイギリス軍に大勝利を収めるが現地のイスラム教徒の若者に暗殺される。
- 13 ルイ 16 世とマリー・アントワネットとのあいだに生まれた長女で、マダム・ロワイヤルと呼ばれた。革命時、タンブル牢獄で獄死したルイ 17 世 Charles-Louis, future Louis XVII (1785-1795) の姉にあたる。彼女は大革命を生き延び、1799 年にアングレーム公 le duc d'Angoulême (1775-1844) と結婚した。
- 14 《Les faux Louis XVII》, in *Grand Dictionnaire du XIXe siècle*, 1875 (1982), Larousse, t. 14, p. 716.
- 15 ディアポラマ diaporama, 写真発表の一形式で、スライド上映に合わせて音楽、効果音、テキストなどを流すもの。
- 16 Cf. Claude Guillet, *op.cit.*, p. 181.
- 17 Cité par Claude Guillet, *op.cit.*, p. 186.
- 18 《Miracle de la Salette》, in *G. D. U. du XIXe siècle*, t.21, p. 108.
- 19 グルノーブルに、ラ・サレットの出現に刺激を受けた伝道団が成立されたという噂を耳にすると、メラニーは、自身を創立者とする「神の御母修道会」の規則書を印刷した。この修道会の男性部会がイエス＝キリストの福音を一切の歪曲を排して伝道する「終末の使徒」である。Cf. Claude Guillet, *op.cit.*, p. 180.
- 20 Cf. Claude Guillet, *op.cit.*, p. 181.
- 21 拙稿「“神の死” とオカルティズムの猖獗— “19 世紀的なるもの” をめぐって オカルトの世紀と聖母マリア (その 1)」『学苑』平成 18 年 9 月号, 昭和女子大学, 2006, 49 ページ。
- 22 Georges Sorel, 《La crise de la pensée catholique》, in *Revue métaphysique et morale*, 1902, 10, 5 (septembre), pp. 523-551.
- 23 松浦寿輝, 『エッフェル塔試論』, 筑摩書房, 1995。
- 24 Alain Corbin, *Les filles de noce*, Champs Flammarion, 1978, 1982, p. 189 et 253. アラン・コルバン著, 杉村和子監訳『娼婦』, 藤原書店, 1991 年, 176, 235 ページ。
- 25 J.-K. Huysmans, *A Rebours* [1884], Gallimard, Coll. 《Folio》, 2^e éd. 1977, 1992, p. 289.; ジョリス＝カルル・ユイスマンス, 澁澤龍彦訳『さかしま』, 桃源社, 1962 年, 250 ページ。
- 26 Alain Corbin, *Les filles de noce*, p. 189. 『娼婦』176 ページ。ただし、ここでの訳文は筆者による。
- 27 Alain Corbin, *Les filles de noce*, p. 181. 『娼婦』168 ページ。
- 28 「現代的な調香師のモデルをたどってゆけば、結局、一八八四年のユイスマンスの『さかしま』にいきつく。デ・ゼッサントは調香のテクニックのすべてを心得ている。デ・ゼッサントの偉大なる調香は、一連の秩序だったプロセスをふんでおり、着想から実際まで、すべてがそろっている。彼は既成の調合法にたよらず、自らの詩想に導かれるままに香水をつくりだす。まずはじめに背景（「花咲く牧場」）をしつらえ、（「人間くさい匂いのエッセンスを少々ふりそそいで」）ひとつの雰囲気をかもしだし、そこに、ある情感をこめる（「ふりそそぐ陽光をあびて野を駆けるよろこび、汗くさい笑い」を思わせる香り）、そうしておいて、そこに強烈な現代性（「工場のはきだす煙」）をきざみつけるのだ。コティが「オリガン」をつくりだしたのは、それから二〇年後のことであった」, アラン・コルバン著, 山田登世子・鹿島茂訳『においの歴史—嗅覚と社会的想像力』, 藤原書店, 1990 年, 268-269 ページ。Alain Corbin, *Le Miasme et la jonquille*, 1982,

1986, p. 232.

この匂いに対する感性の変化は、前著『娼婦』で指摘されていた性に対する感性の変化と密接に連動していることは、以下の結語をみれば一層明らかとなる。

「さまざまな分裂や対立のもとになってきたのは、空気・垢・糞便といったものをいったいどう考えるかという、二つの異なるとらえかたであった。そこから、欲望のリズムをいかに扱い、欲望にまつわる香りをどう扱うか、相異なる二つの管理のしかたが生じてきた。そうして結局それらの分裂、対立の落ちつくところ、それが、いま私たちの生きている、悪臭のしない、無臭の生活環境なのである。百年の長きにわたって、人びとの嫌悪感と親近感の歴史をいろいろ、浄化の歴史をいろいろってきたこれらさまざまな出来事は、もろもろの社会的表象と象徴系をくつがえしてしまった。それを十分に理解しておかなければ、十九世紀の社会的葛藤の根底にひそむ深みをはかり知ることができず、ましてや、現代のエコロジーのめざす夢の位相を把握することもできないであろう」『においの歴史』316 ページ。 *Le Miasme et la jonquille*, p. 270.

29 この事情については別稿で詳説する予定である。

30 マルティン・ハイデッガー、渡邊二郎訳、『「ヒューマニズム」について—パリのジャン・ボーフレに宛てた書簡』、筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉1997年、2005年、97—98 ページ。

31 Robert Schnerb, *Le XIXe siècle*, PUF, Coll. «Quadrige», 1968, 1993. 特に, 5^e partie, Ch. II «Le renouveau idéalisme et spiritualisme en Europe», pp. 481—492.

32 Cf. Alain Covbin, *Les filles de noce*, p. 388. アラン・コルバン『娼婦』366 ページ。

33 この論考、というよりも私のユイスマンス研究全体にとって基本的な発想となっているこうした「19世紀末」観に対して最初のインスピレーションを与えてくださったのは、もうはっきりとした日付も覚えていないが、最近、急逝された阿部良雄先生が1980年代の初頭にブリヂストン美術館で行った「世紀末美術」についての講演である。感謝の念とともに、ここにその記憶を記しておきたい。

(おおの ひでし 総合教育センター)